

ディキンソンの草稿についての一考察

嶋 崎 陽 子

A Study of Emily Dickinson's Fascicle Poems_____

Only about ten poems of Emily Dickinson were published during her lifetime and even these appeared before the public with some alterations made by the editors without the author's full consent. Therefore none of her poems left in holograph manuscripts has the final sanction of authorial intention.

The following article, however, will illustrate that in cases of such poems of which the comparison of semifinal drafts and fair copies is possible, one is able to get a glimpse of the poet's intention in the poetic composition through the study of the selections or rejections of the alternative readings suggested and jotted down for some words, phrases, or lines in the drafts.

エミリー・ディキンソンが残した詩の数は1,700篇を越えるものであったが、生前に発表したのはその中の僅か10篇余りに過ぎなかった。しかし彼女の詩作活動が最も活発であった、1859年頃から1864年頃にかけて約800篇に及ぶ作品が、彼女の手によって清書され、40冊の小冊子、即ち Fascicles と20束の Sets と呼ばれる形のものに纏められていたことを、彼女の死後、妹の Lavinia が初めて発見したことは今では周知の事実であろう。この Fascicles は、ディキンソンの詩集の初期の出版をめぐる複雑な事情のもとで分散され、その後は幾つかの別々の図書館に保管される結果となった。したがってその全貌を的確に知ることは困難であった。しかし、1980年に R. W. Franklin の手によって、初めてディキンソンの自筆原稿は、可能な限り Fascicles 及び Sets の纏め方と並べ方に近いものに復元され、複製版として出版されたのである¹⁾。この事がディキンソン研究に多くの新しい道を開いたのは云うまでもない。

この複製版を見ていくと次の事実に気付く。即ち一応 Fascicles の中に清書された筈の作品であっても、所々の語や行に十の印が付けられ、そしてその側に、或いはその詩の終わりにそれぞれの読み換えのための選択語が書かれていることである。したがって Fascicles や Sets の中に書き写されたと云ってもそのような作品は、いわば推敲中のもの、すなわち Johnson も云うように草稿と見るべきであろう。その推敲が完了したことを証拠づけるのは、それに基づいて書かれた清書が存在する時であり、それ以外の場合には、これらの詩は決して完成されなかったとみなすべきなのかもしれない。

草稿は本来、作者によって発表、出版されたテキストとの比較を通して作者の創作の過程、或いは姿勢を知るための極めて貴重な資料なのである。しかし「ディキンソンは一度も自分から出版を望んだことはなかったし、出版のために作品を準備したこともなかった。」²⁾ 極く限られた数の作品を除いたほかは、最終的テキストと決められるものさえ存在しないので、読者はことばの選択に関しても彼女の意向は何も推測できないのであ

る。したがって、せっかく残されている草稿中の選択語を考察しても、十分な結果は期待できないかもしれない。

もちろん草稿が残っていない場合には、たとえある作品に数篇のコピーがあっても、ディキンソン自身が、何れを最終的なテキストと考えていたかは矢張り知る由もないのである。たとえ数篇の“variants”が残っていても、ディキンソン自身はそのどれにも満足していなかった可能性も大きい。或いは逆に晩年に近い作品の中であの有名な“A Route of Evanescence” (P-1463) のように、内容、形式ともに同一である五篇ものテキストがあり、数人の友人に送られた場合があると、このテキストこそディキンソンが自信をもって最終版と考えていたものと云えるかもしれない。

このような状況にも拘らず、本論では敢えて草稿版に記された選択語をとりあげて幾ばくかの考察を試みたい。云うまでもなくここで対象としたのは、あくまでも草稿と草稿を基にした一応清書と呼べるテキストが存在する作品である。ここにのみ私たちは推敲に際してのディキンソン自身の言葉の選択を見ることができ、詩作に於いて彼女が意図するところを些かなりとも推測できるからである。なお、テキストについての詳細及び草稿の引用は、Johnson の集成版³⁾を基本とし、Franklin の版⁴⁾を参照した。

さて草稿と清書とを比べて先ず気付くのは、殆どの場合、形式や句読点については両者は幾分異なっていることである。例えば多くのものは草稿の段階では幾つかの連に分けられているが、清書では一つに続けられている、或いはディキンソン特有の大文字の用い方にも両者の間に違いがある。しかし本論では原則として、こうした形式等についての比較は省き、草稿に書き込まれた選択語の中でどのようなものが選ばれ、それが作品にどのように影響しているかを主に見ていきたい。

Fascicles 1 番から10番までの作品、即ち年代的には1858年頃から1860年頃までの作品は、僅かの例外を除けば、読み換えの指示、即ち選択語の書き込まれた確実に草稿と見なすべきものはなく、むしろ殆んどがはっき

りと清書という意識をもって書き写されていると推測できる。したがってこれら初期の作品にはもう一部コピーがあって、友人、特にエミリーの兄嫁である Sue 等に送られていることが多いが、それらは先に触れたような形式や句読点については幾らかの違いはあっても、大方はまったく同一のテキストなのである。

上記の僅少な例外の一つであり、選択語の書き込みとしては最も早期のものが Fascicle 5 番の “Her breast is fit for pearls” (P-84) である。Fascicle 中のテキストでは、5 行目の “rest” に “home” の選択語が付けられている。この草稿と大体同じ頃に Samuel Bowles に送られたコピーが一応清書と見なせるようであり、集成版ではこれをテキストとしている。

Her breast is fit for pearls,
 But I was not a “Diver”—
 Her brow is fit for thrones
 But I have not a crest.
 Her heart is fit for *home*—
 I—a Sparrow—build there
 Sweet of twigs and twine
 My perennial nest.

このように清書では草稿の中で選択語であった “home” が選ばれている。この詩は友情を詠うものであり、最終行では、愛する友の心に永久の巣を作ろうという主題が示されている。したがって “rest” も “home” もいずれも安息の場を表現するものとしては適語ではあるが、ディキンソンがより鮮明なイメージを持つ home という語を選んだことに注目したい。

このように、より具体的な語を、即ちより鮮明なイメージを求めることは常にディキンソンが詩の中で目指すところであった。たとえば Fascicle 12 番にある「風」を描写している優れた詩 “Of all the Sounds dispatched abroad,” にもそのような彼女の卓越したことばの選択が見られる。この作

品には三つのコピーがあり、1862年の4月25日に T. W. Higginson に書いた手紙に同封されているもの、同じ頃 Sue に送ったもの、そしてそれらのテキストのもととなっていた Fascicle の中の草稿とである。この草稿の中では5行目、6行目は次のように書かれている：

5: The Wind does—working like a Hand

6: Whose fingers brush the sky—

この6行目の“brush”には“comb”が選択語としてあげられている。続く7行目、8行目は、

7: Then quiver down—with Tuft of Tune—

8: Permitted Men—and Me—

となり、ここでは“Men”に対して選択語“gods—”が書き込まれている。さらに32行目の風の動きを音のキャラバンと云う比喻でとらえているが、その中で、“Then knit—and passed”の“passed”の代りに“swept”を提示している。これらの選択語のうち、“comb”と“swept”の二つが清書の中に用いられており、gods は、Gods となって取り上げられている。これらの語は疑いもなく、すさまじい風のエネルギーを一層効果的に表現するものといえよう。さらに草稿では何も読み換えは示唆されていないが、先に触れたキャラバンの比喻は Sue 宛の清書では次のように使われている。

I crave Him Grace of Summer Boughs—

If such an Outcast be—

Who never heard that Fleshless Chant—

Rise solemn on the Tree—

As if some Caravan of Sound—

Off Deserts in the Sky—

Had parted Rank—

Then knit and swept

In Seamless Company—

上記引用の6行目の“parted”は、草稿では“broken”であったが、二つの清書ではこのように“parted”に書き換えられている。これは既に述べた“passed”から“swept”への修正と相まってイメージの鮮明度を高め、読者の感覚への働きかけを強めるものである。

もう一つ同じ Fascicle 26番の“The Soul that hath a Guest” (P-674)を見よう。この草稿は1862年に、そして Sue 宛の清書は翌年に書かれた。草稿では3行目の“Diviner Crowd at Home”の“at Home”の書換えとして“within”をあげているが、後では用いてはいない。来客のイメージが中心になっている詩であるから、イメージ統一の観点からも“at home”は当然の選択といえる。最終行、“The Mightiest—of Men”が“The Emperor of Men—”に換えられたのも、同じ効果を持つとともに一層の具体性を与えることにより、イメージの鮮明化も助けている。

推敲の考察から、ディキンソンの詩の中でことばの果たす役割、ことばの持つ力の強さはさらに証明される。Fascicle 11 番に草稿が入っている“The Drop, that wrestles in the Sea—” (P-284)を読もう。これも誰かに送ったか、或いは送るつもりであったらしく、その用紙に折り畳まれた跡のある清書が残っている。草稿も清書も共に1861年に書かれている。草稿版を引用する。

The Drop, that wrestles in the Sea—
 Forgets her own locality
 As I, in Thee—

She knows herself an Offering small—
 Yet small, she sighs, if All, is All,
 How larger—be?

The Ocean, smiles at her conceit—
 But she, forgetting Amphitrite—

Pleads “Me”?

4. Offering] incense⁵⁾

ここにみられるように、4行目の“Offering”の選択語として“incense”を作者はあげており、そして清書の中ではそのように書き換えている。“incenses”は“offering”よりも明らかに具体的な語であり、儀式的なイメージを喚起する。第一連の内容のみから考えれば、むしろ“offering”の方が、自分よりも遥かに大きな存在に身を委せると云う、この連の主題的心情を素直に表わすかもしれない。しかし一方、その大きなものの中で、今や“自己の存在感を失いかけている”“I”が小さいながらも自己のidentityを主張している第二連を考えると、単なる捧げ物という意味の“offering”と云う語よりも宗教的儀式において捧げられるものであり、且つその芳香を周囲にただよわす“incense”の方が強く自己主張のテーマを伝達できる語といえよう。そしてこれが第三連のAmphitriteを押し退けてもPoseidonに愛されようとする彼女の強引きへと、より自然につながっていくように思う。

“Father—I bring thee—not myself—” (P-217) は前述の詩と同様、1861年頃に書かれたと云われる。Johnson 版の番号は321番となっている。Fascicle 12番に納められた草稿は次のとおりである。

Father—I bring thee—not Myself—

That were the little load—

I bring thee the departed Heart

I had not strength to hold—

The Heart I cherished in my own

Till mine—too heavy grew—

Yet—strangest—heavier—since it went—

Is it too large for you?

3. departed] imperial

4. strength} power

Sue に送られたこの詩の清書には、草稿では何等言及されていなかった 4 行が冒頭に加筆され、5 行目は草稿の 1 行目を書き換えたものである。

Savior! I've no one else to tell—

And so I trouble *thee*.

I am the one forgot thee so—

Dost thou remember me?

Nor, for myself, I came so far—

That were the little load—

I brought thee the imperial Heart

I had not strength to hold—

The Heart I carried in my own—

Till mine too heavy grew—

Yet—strangest—*heavier* since it went—

Is it too large for *you*?

草稿と清書との間には、その他にも、草稿版には書き込まれていなかった修正が幾つかなされている。即ち草稿 3 行目の“bring”は過去形に、5 行目の“cherished”は“carried”に換えられているのである。この二つの版を比べてみると、内容的に大きな違いはないが、草稿版の方では愛する人が去った後の詩人の悲しみの感情が中心になっているのに対して、清書の方では直接的な悲嘆の情は抑えられ、むしろ去った人自身についての高い評価と、それに伴う詩人の崇敬の念がより強く表面に出されているように思う。この事は草稿版、3 行目の“departed heart”に付けられた選択語“imperial heart”が清書では取り上げられた事にも示されている。ここにもディキンソンのことばに対する感性の鋭さと彼女の詩に於けることばの働きの重要さが感じられる。

ディキンソンの作品の中で最もよく知られているものの一つである“*There came a Day at Summer's full*” (P-322) には 3 部のコピーがあ

り、推敲の過程を見るのには貴重な資料である。草稿は Fascicle 13番にあり、これを手直しし、清書したと思われるものの一つは Higginson に送られている。もう一部のコピーも、ほとんどこれと同じ筆跡で書かれているので、Johnson はほぼ同時に清書されたのであろうと推定している。しかし草稿版の方は、これらより少し早い時期に書かれていたのであろう、と云うのはこの詩の最終連は、その年の1月にエミリーが E. S. Dwight 牧師に出した手紙の中で既に引用されているからである。

この詩はディキンソンの恋愛詩の一つとも云えるもので、伝記的側面からのさまざまな憶測もなされてきた作品である。Higginson 宛の清書と草稿とを比べてみよう。最初の引用が草稿版のテキスト、次が Higginson 宛のものである。

Thre came a Day—at Summer's full—
Entirely for me—
I thought that such—were for the Saints—
Where Resurrections—be—
4. Resurrections] Revelations

There came a Day at Summer's full,
Entirely for me—
I thought that such were for the Saints,
Where Resurrections—be—

上記に見られるように、草稿では四行目の“Resurrections”の下部に選択語として“Revelations”が書かれているが、それは清書では却下されている。この詩の主題はこの世での別離の苦しみを死後の世界に、永遠への期待で耐えてゆくことであるから、それは復活への信仰によって支えられていなければならない。その意味からも“Resurrections”が残されたことは適切である。

次に第二連を比べてみよう。この草稿ではこの連の3行目、4行目に大

幅な書換えが提案され、下記のように取り消し線が付されている。

The Sun—as Common, went abroad
 The Flowers—accustomed—blew,
~~While our two Souls that~~ Solstice passed—
~~Which~~ maketh all things new.

7. ~~While our two Soul that~~ As if no soul the

8. ~~Which~~ That

したがって、Higginson 宛のコピーでは次のようになる。(但しどうしてか、もう一部のコピーではこの連の3行目の that はそのまま残されている。)

The Sun, as common, went abroad,
 The flowers, accustomed, blew,
 As if no soul the solstice passed
 That maketh all things new—

草稿では「一方私たち二人の魂が至点を越えた」となっており、これは解釈次第では詩人の私的恋愛感情や恋愛体験をかなり強くほめかしているようにも読める。しかし、清書では「一つの魂も至点を越えなかったかのように」と修正され、より簡潔な表現になった、と同時により普遍性をもった陳述に変わった。なぜならこれは「あたかも死に勝るほどの大きな出来事が起きているのも知らぬかのように」と云う意味を含んでいるからである。そしてそれが、後に続く内容、すなわち愛し合う二人に残された最後の時間の緊張感をより効果的に表現する結果となっている。

第三連は草稿では次のとおりである。

The time was scarce profaned—by speech—
 The **falling** of a word
 Was needless—as at Sacrament—
 The wardrobe—of Our Lord—

10. *falling*] *figure/symbol*

このように、選択語はこの連の2行目の“falling”に *figure* と *symbol* を考えたようであるが、前者にはラインが引かれて取り消されており、結局 Higginson 宛の清書では *symbol* に落ち着いている。しかし、もう一方のコピーでは草稿の *falling* をそのまま残している：

The time was scarce profaned, by speech—
 The symbol of a word
 Was needless, as at Sacrament,
 The Wardrobe—of our Lord—

草稿では“falling of a word”を発話の意味で用いていたのを、ここで“symbol of a word”に置き換えたのは、「秘蹟においてことばの印が不要であるように」と云うコンテクストをもっているところから、詩の中でのより強固な有機的構成を意識した、極めて効果的な選択と思われる。そもそも秘蹟そのものが印であるように、恋人達の最後の逢瀬そのものも愛の証たりうるのであり、ことばを必要とはしないのである。

第四連、五連は字句上はいずれのコピーも同一である。

Each was to each—the sealed church—
 Permitted to commune—this time—
 Lest we too awkward—show—
 At “Supper of the Lamb.”

The hours slid fast—as hours will—
 Clutched tight—by greedy hands—
 So—faces on two Decks—look back—
 Bound to opposing Lands—

草稿では第六連の一行目の“leaked”に取り消しラインが引かれており、選択語として“failed”が書かれている。しかしいずれのコピーの中でも書き換えはしていない。

And so—when all the time had leaked—
 Without external sound—
 Each—bound the other's Crucifix—
 We gave no other bond—
 21. leaked] failed

“leaked” に対する “failed” が退けられたのは鋭い選択である。leak とは水などの漏れることを表わす語であるから、第5連の “slid”, 即ち「滑り落ちる」と相俟って、「時」は、食欲な手をもって如何にしっかりと捕まえておこうと試みても、忽ち流れ去ってしまうと云う様をより生々しく描くことができるのである。

最後の連は三部のコピーの中で皆同一である。

Sufficient troth—that we shall rise—
 Deposed—at length, the Grave—
 To *that* new Marriage—
 Justified—through Calvaries of Love!

同じく有名な作品である “Dare you see a soul at the ‘White Heat?’” (P-365) も三部のコピーがあった筈だといわれるが、Higginson の手に渡ったものは今では喪失してしまった。Fascicle 20番の中のもの草稿であり、下記に見られるように4, 5, 6行目に選択語が提示されている。それら三ヶ所全てが清書に際して修正されている。

Dare you see a soul at the “White Heat?”
 Then crouch within the door—
 Red—is the Fire's common tint—
 But when the quickened Ore

 Has sated Flame's conditions—
 She quivers from the Forge
 Without a color, but the Light

Of unannointed Blaze—

Least Village, boasts its Blacksmith—
Whose Anvil's even ring
Stands symbol for the finer Forge
That soundless tugs—within—

Refining these impatient Ores
With Hammer, and with Blaze
Until the designated Light
Repudiate the Forge—

4. quickened] vivid 6. She] It
5. sated] vanquished

ここでは、高揚した魂の状態を白熱化した鉱石の比喩をもって語っているのであるが、高熱の炎の中で熱せられている鉱石のことを草稿では“quickened Ore”としているが、修正後は“vivid Ore”となっている。前者は魂の興奮を伝達する上では効果的かもしれないが、この箇所では描写の対象はあくまでも鉱石なのであるから、感情移入は避けてしかるべきである。大体草稿では鉱石の擬人化さえみられ、6行目ではその代名詞として“she”が使われている。これは清書では当然“it”に置き換えられているが、その間の“[Ore] Has sated Flame's conditions—”の“sated”〔食物を十二分に食べる〕は“vanquished”に換えられている。その関連に於てか否かの確証はないが、9行目の“Least Village”を主語にもつ動詞“boasts”は、より中性的な“has”に換えられている。しかし13行目の“impatient Ores”については、修正は行われていない。

このようにここではディキンソン独特の方法、即ち感情的言語を避けながら、実際には強い感情を喚起する言語表現の一端をみることができる。

即ち語の巧妙な選択が、詩に客観性をもたせながら、同時に詩人の体験的なものを読者の感覚に強く訴えかけるのである。

上に挙げた P-365 に引続き、もう一つの例として P-315 を見ることにする。この草稿は Fascicle 22番に書かれている。

He fumbles at your Soul
 As Players at the Keys—
 Before they drop full Music on—
 He stuns you by Degrees—

Prepares your brittle substance
 For the ethereal Blow
 By fainter Hammers—further heard—
 Then nearer—then so—slow—

Your Breath—has chance to straighten—
 Your Brain—to bubble Cool=
 Deals One—imperial Thunderbolt—
 That peels your naked Soul—

When Winds hold Forests in their Paws—
 The Firmamanets—are still—

5. substance] nature

12. peels] scalps

9. chance] time

14] The Universe—is still

ここに見られるように、1862年頃に書かれた草稿には四箇所の読み換えが考えられている。同じ年に Sue 宛に送られた清書では、それら選択語句の全てがとりあげられている。12行目の“peels”に対する“scalps”は文脈からみて極めて適切である。なぜなら、ここでは詩人にとってのある衝

撃的な体験を詠っているものであり、その比喩の一つとして、落雷が大木の幹の頭を削り落とす様をあげている。その描写としては、選択語は peel よりも遥かに実感のこもった語であり、読者の感覚にも強い刺激を与える。さらに最終行を書き換え、“The Universe—is still—”でこの詩を終えることによって、それまでに述べてきた衝撃の後の、ある種の無感動状態を如実に伝えている。しかも“The Universe”と云う一つのことばが、詩人の精神をある一点に集中させる役割を果たしているのである。

しかし、草稿の修正がもとの詩の力を弱めてしまった場合もないわけではない。その一例として、1863年頃に Fascicle 38番に書かれた P-876 の草稿を引用してみよう。

It was a Grave—yet bore no Stone—
 Enclosed 'twas not—of Rail—
 A Consciousness—it's Acre—And
 It held a Human Soul—

Entombed by whom—for what offence—
 If Home or foreign—born—
 Had I the Curiosity—
 'Twere not appeased of Man—

Till Resurrection, I must guess—
 Denied the small desire
 A Rose upon it's Ridge—to sow—
 Or sacrificial Flower—

12. sacrificial Flower] palliate a Briar—

この詩では、自由を奪われた人間の魂を、墓場にいる死者を比喩として描いている。或いはことさらに自由を束縛されている人を扱っているので

はなくとも、この世に生きる人間は全て肉体をもつ故に、その存在の自由には限界があることを指しているのかもしれない。確かに死者と同様に彼らは他の人間によって慰められることも、小さな願望を満たすことも、未来を作ることも、罪の償いのための善業も完全には為し得ないのである。Fascicle の草稿では選択句として最終行の “Or sacrificial Flower” には “palliate a Briar—” が提示されている。そしてその後には書かれた清書では “Or take away a Briar” に換えられたのであるが、この過程で、内容的には償い云々のニュアンスはなくなり、むしろ苦しみを取り除くこともできない、ひたすら忍耐する魂の状態を色濃く出す結果となっている。これは書換えが内容を、やや浅薄にしてしまった数少ない例の一つといえよう。

ディキンソンの詩的インスピレーションは1863年以降、急速に衰えを見せたと云われ、このことはさまざまな角度から証明される。ここでは推敲を通して調べてみたい。

Set 7 に入っている “A bold, inspiring Bird” (P-1177) の草稿は、1865年頃のものと言われているが、ディキンソンは1871年にはこれに手を加えて清書した。しかしこれも結局、清書と呼ぶことができない。その理由は、その中でも4行目の “Warrant” に “Business—” という選択語が付けられているからである。しかもその後、再びこの1871年のテキストに戻った形跡があり、ここで以前に一度書き換えた7行目の “Much” “Mien,” 8行目の “Magistrate” の3箇所を鉛筆で消し、そこに Set 7 の草稿で用いたもとの語を改めて補っているからである。このような迷いはディキンソンの詩作活動の最盛期には見られなかったことで、この辺りにも彼女の詩的靈感の衰えを感じる。全体的にみても70年代の作品には草稿で残っているものが非常に多く、しかも60年代よりも選択語の付けられている数もはるかに多い。また、清書の段階に至っても選択決定ができない状態になっているもの〔例えば “The Clover’s simple Fame” (P-1232), “After all Bids have been investigated and laid aside—” (P-1395)] などがあ

る事実も、後期のディキンソンの一面を見せているのかもしれない。

もちろん晩年に近い作品にも、非常に優れたものもある。1877年に Higginson と Bowles それぞれに送られている “I have no Life but this—” (P-1398) にはこれら二つのコピーと、全くの下書きと見るべき原稿とが残っている。そして最終的に完成されたテキストをこの下書きと比較してみると、ディキンソンが推敲に当って、選択語の中から如何に見事に最も力強い、適切な語を選んでいるかに気付く。特に最終行を下書きの “The loving you” という漠然とした表現から、“The Realm of you” に換えることによって、全体を統一する空間的イメージをしっかりと作り上げ、彼女の詩的感性を遺憾なく発揮しているのを目の当たりにするのである。

I have no Life but this—

To lead it here—

Nor any Death—but lest

Dispelled from there—

Nor tie to Earth to come—

Nor Action new—

Except through this extent—

The Realm of you—

冒頭に述べたように基だ少ない資料ではあったが、ディキンソンが草稿に付した選択語から推敲の過程を考察し、改めて彼女の詩のことばの力を痛感した。

注

- 1) R. W. Franklin, *The Manuscript Books of Emily Dickinson*, 2 vols. (Cambridge, Mass., and London: Harvard University Press, Belknap Press, 1981).
- 2) Franklin, *The Editing of Emily Dickinson: A Reconsideration* (Madison, Milwaukee, and London: The University of Wisconsin Press, 1967), p. 128.
- 3) Thomas H. Johnson: *The Poems of Emily Dickinson: Including variant*

readings critically compared with all known manuscripts, 3 vols. (Cambridge, Massachusetts: The Belknap Press of Harvard University Press, 1955).

- 4) Franklin, *The Manuscript Books of Emily Dickinson*.
- 5) Johnson の集成版では、草稿の選択語はこのような形式で書かれている。数字は行を示す。